■第１章－瓦について■

法隆寺と四天王寺は、ともに聖徳太子ゆかりの寺として有名です。それは出土瓦も物語っています。

聖徳太子は、593 年に推古天皇の摂政（せっしょう）に任命されました。

その後、飛鳥から斑鳩に拠点を移し、607 年には、創建法隆寺である若草伽藍（わかくさがらん）を創建しました。

四天王寺の創建には、若草伽藍の金堂に使用された素弁八葉蓮華文軒丸瓦（そべんはちようれんげもんのきまるがわら）と同笵（どうはん）の軒丸瓦が使用されました。

若草伽藍の金堂の創建年代は、楠葉平野山瓦窯群（くずはひらのやまがようぐん）の須恵器（すえき）の年代や、金堂薬師如来坐像（やくしにょらいざぞう）の光背銘（こうはいめい）の紀年から、607 年以降、610 年代と考えられています。

四天王寺の軒丸瓦は、若草伽藍よりも笵傷が進行しており、若草伽藍よりも新しい年代に生産使用されたことがわかります。

つまり、考古学的には、四天王寺の創建は若草伽藍よりも後であると考えられます。

日本書紀では、623 年に、新羅（しらぎ／シルラ）と任那（みまな／ニムナ）から仏像や仏具などが献上され、仏像は葛野（かどの）の秦寺（はたでら）に、他はみな四天王寺に納められたと書かれています。

このころには、四天王寺の主要伽藍は完成していたとみられ、出土瓦の年代とも矛盾しません。